

畑山博

幻のオホーツク共和国



幻のオホーツク共和国

畑山  
博

著者略歴 昭和10年東京に生れる。昭和47年「いつか汽笛を鳴らして」(文藝春秋刊)により、第67回芥川賞受賞。「冬のスサノオ」(集英社)、「海に降る雪」(講談社)など現代の神話を書きつづける。

書きおろしノンフィクション  
幻のオホーツク共和国

昭和五十九年十月五日 第一刷発行

著者 畑山 博

発行者 鈴木泰二

発行者 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五

郵便番号 一四五

電話 東京七二〇局一一一一

振替 東京八一四二九三〇

印刷

信毎書籍印刷株式会社  
株式会社美術版画社

© HIROSHI HATAYAMA Printed in Japan 1984  
165 306-1002 ISBN4-05-004936-8 C0395

※この本に関するお問合せなどありましたら、文書は東京都大田区上池台4の40の5(〒145)学研お客さま相談センターへ、電話は東京(03)720-1111へお願いします。

※本書内容の無断複写を禁じます。

# 目 次

## 第一章 宝のくに千島

歌う千島海苔／ウルップの狐／ラッコと水の花火  
／択捉の少女

7

## 第二章 開拓者たちの歴史

一番のりは電信柱だった／北辺の牧場／嵐のため  
に赴任地が変わった／多楽島の四季／漁師たちの一  
日／冬の仕事

27

## 第三章 島に残る中世

商、士、出稼ぎ、漁民／仕込み親方の制度／択捉  
の檻／水晶島のピラミッド

56

## 第四章 しかも冬のエデン

多楽島の冬ごもり／ホービキの夜

70

## 第五章 オホーツク 25時

リンドバーグの翼／色丹郵便局／選挙奇談／さい  
はての小学校／それぞれの生命／島の事件簿／海  
の生きものたちの祭り／雪の中の恋／択捉のアイ  
ヌ／択捉の熊祭り／熊の親仔／択捉の小原庄助さ  
ん／流水の島

## 第六章 戦場としての北方領土

戦争は密かに準備された／連合艦隊出撃の島／日  
の前で撃沈される船／根室大空襲と戦いのフラッ  
シュ／敗戦の日・択捉島そのⅠ／敗戦の日・択捉  
島そのⅡ／敗戦の日・国後島／敗戦の日・水晶島  
／望郷の意味／多楽島の大統領／占領下決死の脱  
出／択捉、去る者と新しく来る者たち／ミス択捉  
島／択捉、ソ連軍上陸／北辺のロマンス

## 第七章 返還の嘘

引揚者給付金支給／真の返還運動のために

184

## 第八章 幻のオホーツク共和国

195

返還後のヴィジョン／日本国千鳥県／四島独立、

首都持ちまわり連邦／郷愁の古里／国後の花嫁／

多楽の葬列／忘れられた人びと／待望の北方領土

墓参／それぞれの棄民／骨たちの行方／沈みゆく

島々

## 後記

248

### 装幀

アートディレクション 山岡茂(スタジオ・ギブ)

デザイン 関さゆり(スタジオ・ギブ)

カバーイラスト 梶山俊夫

幻のオホーツク共和国





## 第一章 宝のくに千島

### 歌う千島海苔

今年七十六歳になる元漁師石川兼松かねまつさんは、もう覚えていない。

あの北の涯はて、択捉島エトロフの海岸で、数え切れないほど沢山の冬を一緒にすごしたはずの伯母おばたち夫婦の名前を。

はて、どんな漢字を書いたものだったかと、思い出すことができない。

もしかすると、伯母たち自身ももう忘れてしまっているかもしれない。島には、そんな悲しいさだめを負って渡った者たちが多かったから。

そう言えば、手拭いかぶりをして、きりりと脚絆まろはんを巻いた姿で、海苔干し場のりで働いていたあの伯母が、いつ、どんなつてで島に渡ってきたのかも、彼は聞いていない。

無口だが豪快な働き者だった伯父おじとどういいういきさつで夫婦になったのかも、どんな喜びや涙があったのかも聞いていない。

一度もそのことを話すことなく、すでに彼らは択捉島の土となり、眠っている。

老いた目を閉じると、石川兼松の思い出の中の景色は、目を開けていたときよりもわずかに濃くなるけれども、でもまだ霧の中にゆらめいている。

じっと耳をすましてみる。

海を渡るかすかな風の音がする。

風音の中に、

「マサエ。マサエ」

と呼ぶ伯父ダイキチの音がする。

「そうだった。ソトセダイキチとマサエという名の夫婦だった……」

老いた兼松は、ゆっくりと臉まぶたを押さえてみる。

島に生き、島で死んだ者たちの名前がみんなそうだ。どうしてか漢字で思い出そうとするとなじまない。カタカナ名で思い出そうするときだけに、あのなつかしいオホーツクの背景になじむこと

を、彼はいつもふしぎに思う。

大正十二年というから、東京では大震災のあった年だ。その年の春、秋田県本庄町ほんじょうの高等小学校を終えたばかりの石川兼松は、伯母おばマサエを頼って、単身ひとり択捉島に渡った。

船大工の次男に生れ、きょうだいきょうだいが四人もいた少年には、そのまま家にとどまることはできなかった。

頼って行った伯母の家は、小屋のように小さく、山から刈り出した七尺もあるいたどりの垣かきで囲まれていた。

他の家々もそうだった。厚い垣をめぐらせても一冬もたないほど風が強かった。

伯母夫婦は、定置網漁の権利を持っていなかったので、他の漁師の漁場で手伝いをして暮らしていた。

伯父は船に乗って沖へ出て鱈たらや鱧ますを獲り、伯母は浜辺でその魚の腹をさき、塩漬しおづけけにしたり、すずこを取る仕事をした。

が、いつまでも人に使われていたのでは発展がないので、やがて伯母夫婦は、海苔採取の仕事に転換した。当時島では、定置網漁以外の漁業行為には漁業権が必要なかったのだ。

七月。択捉島西海岸に遅い夏がやってくると、磯場いそばの岩肌いわはだがじくじくと内側からうごめきはじめる、まるで黒い汗のように海苔を吹きはじめ。

すると、つなぎのゴムの作業衣を着て、胸まで水につかりながら、伯母たち夫婦と彼は、海苔をか  
くのである。

荒波に打たれながらかく海苔は、本州や北海道あたりの小さい海苔とはくらべものにならない豪快  
さだ。両手を大きく横に伸ばしたほどの長さのあるのがざらなのだ。

そうしてかき取った海苔は、かますに入れて海につけておく。

海苔干しは、晴れた日だけしかできないお天道さんまかせの仕事。日が照り出すと、海にいた者ま  
で急いで陸に駆け上って干す。

それだから、干せない分はいつも海に浮かんでいる。

干す日は、伯父が大きな切株どんこの上に海苔をのせ、大庖丁おぼうちょうで勇ましく刻む。

するとそれを伯母が、薄く水を張った木枠きわくの中に入れる。

木枠の底にはすだれを敷いてあるので、ゆっくりと刻み海苔を押しつけながらひろげてやると、そ  
れはいい具合にすだれなじみながらひろがってゆく。

漁場では副食は一種類。魚の煮たのでも野菜でも何でも汁を入れたままだ一つの皿さらで食べる。そ  
れを三平皿さんぺいざらと呼んでいるが、その皿にちょうど一杯分木枠に入れてやった刻み海苔が、長さ四尺、幅  
二尺五寸、新聞紙より大きい千島海苔になるのだ。

すだれにすっかり海苔がなじむと、すぐ水から上げて、垂らし、水を切る。そうして浜辺の広い干  
し場に並べるのだ。

薄曇りの日には、横たえられた海苔たちは眠っている。

が、かんかん照りの日には、海苔はいっぺんにはしゃいで端の方からばりばりと音をたて、まるでエスキモーのスカートのようになまくれ上る。

風が吹くとさらに大変だ。海苔は、翼つばさでもはばたかせるようにしてはね上り、飛び立とうとする。

そんなとき、兼松も伯母も伯父も、海苔たちのことをやんちゃな子供でも呼ぶように呼びたてながら、必死に家の中へ引っぱり込んだ。

外で乾いた海苔も、乾燥場に吊るして干した海苔も、乾くと家の中で四つにたたむ。

四つにたたむとちょうどアルバムぐらいの大きさになる海苔は、部屋中を息苦しくさせるほどに香ばしい匂においをさせながら、ぱちぱちと歌を唄うたう。

「大きな干し場へ行くと、大勢の男たち女たちが働いているのですよ。男たちはみんな裸です。その裸の汗の匂いに海苔の匂いが混じって、何とも言えないぼわあっとした匂いになるのですよ」

と石川兼松は言う。

## ウルップの狐きつね

働はたらきづめに働はたらき、その上借金をして、二十一歳、函館はこだてへ行いって四百五十円の発動機を一台買った。船の本体の方は、山から木を伐きってきて自分で作った。

沖にある磯場の海苔を採りに行くにはどうしても発動機船が欲しかったのだ。

が、その発動機船は三年でだめになってしまった。

おまけに千島中の海苔が豊漁すぎて値段が急落し、借金の重みがかぶさってきた。

何とかしなければならなかった。

「北へ行かないか」

と誘ってくれる人があった。

現在北方領土の北端とされている択捉島エトクトウからさらに北、中部千島ウルップ島も、当時日本領だった。

が、人口は極端に少なく、全島でたった八人。放し飼いの狐きつねとラッコ、オットセイの監視をする監視員がいただけだった。

その欠員があるというのである。

昭和七年六月。農林省に提出した願書が認められ、石川兼松は、結婚したばかりの妻ナツと〇歳の赤ん坊と共にウルップに渡り、隣の小さな島ラシヨワに上陸した。

ラシヨワには、立派な官舎があった。

択捉島にいる当時には思いもよらなかった独立した台所と二部屋があり、オンドルもあった。

が、家のある場所が、海岸から少し入ったところで、鋭く丘がV字型に切れ込んで奥だったの  
で、何だかすりばちの底にでもいるようだった。

海はV字型にほんのちよっぴり見えるだけだった。

それだから、せっかく湾に船が入ってきてても、またたく間に姿を隠してしまふ。

心細かった。あわてて駈け出して行って丘に登ると、船は、いつだって、夫婦のいる小さな湾を通りすぎて、ウルップ本島の方へ向かうのだった。

目を転じると、隣のマツワ島が見えている。

富士をそのまま小さくしたような形のフヨウ山が濃い噴煙を上げていた。

島での仕事は、三月から十二月までの長い間ずっと、狐の監視をしながら日誌をつけていることだった。

三月には、干潮時になると、おびただ夥しい数のうにが採れる。

それは、採るといふより、スコップですくうのだ。そうして籠かごに入れて陸まで運び、一斗樽いっとだるに詰め塩漬しおづけにする。自家用にも食べるが、大部分は役所の連中がやってきたときに土産みやげに持たせてやる。

うにでなくとも、三月、四月は漁の最盛期である。小船に乗ってほんの小一時間湾内を回っただけで、船べりが沈みそうなほど沢山の魚が獲れる。

それを狐きつねたちにばらまいてやる。

島にはかなり水量のある川があり、川口から少し上ったところに刺し網を仕掛けておくと、アマメスやいろいろな川魚の他に鰯いわしまでかかっている。

年が明けて一月の中ごろになると、狐たちの毛が銀色に整ってくる。



すると、農林省から、今年は何頭獲れという命令がくる。

夫は、銃を持って浜に出る。汐が退くと、狐は何も知らずに山から次々に下りてくる。そこに残ってはねている魚を捕るためである。

それをすかさず夫は撃つ。

一日に二頭ぐらいずつ撃っては、その場で皮にして背負って帰り、妻が干す。

農林省から皮を引き取る船がやってくるのは五月である。

そのころになると、厳冬期に仲間を殺された狐たちの記憶も薄れてくる。

毎日餌を投げてくれる人間の一家になじんで、家へ遊びにくる狐もいる。

ある日、石川兼松は、子供を連れて畠に出ていた。島では、一家が一年中に食べきれないほどの野菜が穫れる。

作業衣の裾をつかんで従って歩いていた子供が、小便がしたいと言い出した。

「自分で行ってこ。畠の端でしてこ」

いつものように彼は言った。

子供は、よちよち歩きをしながら畠の端の方へ行った。

鍬をふるい、何度か彼は土をかいた。

ほんの二、三分の間だったろう。

とつぜん背後で激しく子供が泣き出した。